

(別紙2) 大萱古窯跡群の重要性、一体性、国指定の必要性

(歴史的経緯から)

荒川豊蔵は、昭和5年、牟田洞古窯跡や窯下古窯跡で志野や黄瀬戸、瀬戸黒を発見。瀬戸で焼かれたという定説を覆して窯業史を塗り替えた。当古窯跡群は、美濃桃山陶生産地の記念碑的な遺跡であること。

荒川豊蔵は、この古窯跡のある牟田洞の地に居や陶房を構えるとともに、この谷の環境を守るため、広く土地を取得した。そして、志野や瀬戸黒の復元に挑んで成功。昭和30年に人間国宝に認定され、文化勲章を受章するとともに文化功労者にも選ばれた。当地は、現在の美濃焼の世界において象徴的な場所であること。

牟田洞古窯跡は、過去の出土品から、国宝卯花塙などこの上ない名品を生産したことが判明している。荒川豊蔵とともに、2つの国宝を生み出した場所として、「美濃桃山陶の聖地」とも言える場所であること。

(美濃窯業史の面から)

牟田洞古窯跡や窯下古窯跡は、昭和の初めに採集された資料が、まとまった形で市に保管されており、資料と一体的に研究できる遺跡であること。

大窯期の牟田洞古窯跡と窯下古窯跡は、連房式登窯の弥七田古窯跡に先行する。大萱古窯跡群は、美濃の窯業史の中にあって、大窯から連房式登窯への転換を解明するための絶好の遺跡であること。

牟田洞古窯跡とその資料は、美濃窯業編年の中で「大窯第4段階」の特徴を如実に示す指標遺跡となっていること。

加藤唐九郎が採集した窯下古窯跡の資料には、「文禄貳年八月」(1593)の記年銘を持つ黄瀬戸向付の破片がある。「大窯第4段階」に位置付けられる窯下古窯跡は、実年代を示す資料を出土した数少ない窯跡であること。

牟田洞古窯跡と窯下古窯跡は、100m以内という近接した距離にあり、立地も同じ谷の中央と入口にある。また、稼働時期も「大窯第4段階」という同じ時間を共有するものである。距離と時間から、両者の陶工集団は有機的なつながりを持つことが容易に推定され、その関係や陶工集団の「単位」を考える上で重要な一体的な遺跡であること。

牟田洞古窯跡と窯下古窯跡は、文献史料『大平・大萱窯株数留』(文政12年・1829)や『竈元祖由緒記』(貞享3年・1689)に記される窯の名称や窯数を傍証する遺跡であること。

(文化財としての側面から)

牟田洞古窯跡と窯下古窯跡が立地する谷地形は、開発にさらされることなく、美濃窯にあっては稀に残る良好な保存状態である。この地形は、両者の立地条件を如実に示すものであり、この地形を共有する一体的な古窯跡群と見ることができること。

谷地形も含めた保存措置を図ることは、この一体的な古窯跡群の歴史的、文化財的な価値と切り離せないこと。

牟田洞古窯跡は、踏査や磁気探査、試掘調査により、4基の窯体や作業場跡が確認されている。このうち3基については、保存状態が良好であること。

窯下古窯跡についても、踏査や磁気探査により、4基の窯体や作業場跡が推定されている。今後、試掘調査により確認していくが、現状における地表観察によれば、窯体の保存状態は良好と考えられる。また、作業場跡についても遺構がはっきりと見て取れ、保存状態が良好であること。

文化庁や大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会の見解を要約すると、「大萱古窯跡群は文化財的、歴史的に価値が高く、保護すべき重要な遺跡」、「牟田洞古窯跡と窯下古窯跡を一体的なものとして、立地条件を如実に示す地形も保護することが重要」であること。